
ニューヨーク・ラブストーリー / エピソード5: 姉と弟 (Like A Virgin)

栗須じょの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニコ・マーク・ラブストーリー / ハピソード5：姉と弟（
Like A Virgin）

【ZPDF】

N4881C

【作者名】

栗須じょ

【あらすじ】

賭けビリヤードでローマンに負けたティーン。悪友が望んだ報酬は“女装コンテストにして出場すること”という突拍子もないもの。嫌々ながらも従うティーンだが、本人の意向とは別に、それはなかなかの美人に仕上がってしまう。パーティは穩便に終了するかと思われたその時、会場に現れたのは……。

(前書き)

いわば 一話完結のシリーズ物 につき、ヒプノーシード第1話から
お読み頂けると分かり易いと思います。
連載はまだまだ続きますが、本作品においては完結しています。

「わたし離婚するの」

そう言つたのは九つ年上のoreの姉、アイリーン。

待ち合わせしたカフェの席で、コーヒーが来るより早く、一気に本題に入る彼女。結婚生活に不満を抱えていたのは聞いていたが、ここまでのことだとは思つてもみなかつた。

「そうか……それは大変だつたね」

「“だつた”じゃないの。これからよ。大変なのは

運ばれてきたコーヒーに、アイリーンは砂糖をみつ入れた。それは“砂糖でハイにでもならなきや、やつてられない”という風情だ。

「子供たちはどうするの

「わたしが引き取るわ

「ふたりとも？」

「ふたりとも」頬に落ちた髪を耳にかけ、コーヒーに口をつける。

アイリーンには男女一人の子供がいる。つまりoreの甥と姪。

「勝算はあるの。彼は子供好きなんだろ？」

「あるわ。女よ

「女？ ノーマンは浮氣を？」

「証拠があるわけじゃないけど……わたしたち五年もセックレスだつて以前言つたわよね？ それってどう考えてもおかしいわ。彼はいつも身奇麗にしてるし、枯れた感じがするわけでもない。未だに友達は言うわ『ノーマンって素敵ね』そんな男がセックス無しだなんてあり得ない。彼はしてるわ。絶対。わたしじゃない誰かとね」

「証拠もなく決めつけるのはどうかな」

「女の勘よ。間違いない」言つて、アイリーンはまたコーヒーをすつた。

“女の勘”、そう出られては男たちは成す術もない。むやみに“

女の勘”を否定するのは危険極まりない行為。どう頑張っても男はそれを持つことは出来ないのだから。

「子供たちにはもう?」「

「リロイには言つたわ。『嫌いで一緒にいるよりマシだよね』だつて。あつさりしたものよ。両親がうまくいっていないのは薄々わかつてたらしいわ」

「ちびさんの方は?」

「ステラにはまだ。あの子、おむつが外れたのよ。“ケッコン”つて単語も知つてはいるの」

「そうだな、去年言われたよ『おじたん、ケッコンしてね』」「

「今は保育園のニッキーつて子に夢中よ」

「ヒゲも生えてない赤ん坊なんて敵じやないさ」

「一歳でヒゲがあつたら不気味よ。とにかくステラにはまだ言つてない。どうかしら、“リロン”つて単語は理解できるかな」

「今後はパパとあまり会えなくなる”つてことはわかるだろ」

「それは今もそうよ。ステラが起きてるときに帰宅することなんかめつたにないんだから」

「ママは知つてるの?」

「まだよ、今夜電話する。まずあんたに先に言つとこた方がいいと思つて」「

「なんで」

「もしわたしがママに言つたら、その後すぐに電話がかかつてくるわよ。『もしもし』ティーン? 聞いた? アイリーンが離婚するつて!』」

母親の聲音を真似るアイリーン。確かにそれは予想される反応だ。「そうなる前に知つておいた方がいいでしょ」

「『配慮いたみ』いるね」

「これでようやく無職だわ」

「仕事してたつけ」

「“シェパード夫人”って職業だったのよ。うつとうしい社交や俱

樂部。パーティのホステス。着るものから立ち振る舞いまで気を遣つて……一年中そんな暮らしよ。それでも愛があればよかつた。それさえあれば日々のことはすべて幸福なものになるのに……なんて、わたしつて毎メロの登場人物みたいだと思わない？」

「呑気なこと言つて……これからどうするの」

「しばらくはバタバタになるだろうから、その前にママのところに行こうかと思つて。とっても心配するだらうし、わたしも顔を見て話がしたいしね。戦いの前にマイアミビーチで銳氣を養いたいわ。日焼けするのも怖くない。もうマダム・シェパードじゃないんだか

「う

「真つ黒な顔で法廷に立つなよ。陪審員が同情してくれなくなる」「そこまでの争いにはならないわ。別に相手を粉々にしようつてわけじゃないんだもの。子供のことさえなきや、円満離婚つてとこね」アイリーンはにっこりと微笑んだ。微笑みを見せて、やつれた様子は隠せない。たとえ円満離婚としても、そこに痛みが伴わないわけじゃないだろう。長年連れ添つた夫と別れるといつことかどんなことが、彼女の顔にはしっかりと現れている。

「で、もうそろそろ行かないと、ベビーシッターに延長料金を払うことになるわ。せっかくのお休みに出てもらつてごめんね」

「電話で歯切れが悪かつた理由がこれでわかった」

「あなた夜は？ もしかつたらウチで食事でもどう？」

「いや、いいよ」

「大丈夫、ノーマンはいないわ」

「そうじゃなくて予定があるから」

「デート？ ポールも連れてきていいのよ」

「パーティなんだ。ビレッジの方で」

「あらまあ、いいこと。お友達とパーティなんてわたし何年もやつてない。それじゃ仕方ないわね。楽しんでいらっしゃい」

『楽しんでいらっしゃい』

「そう言われはしたが、きっとそれは難しい。」

『あらまあ、いいこと』

別によかない。今日のパーティはほど気の重いパーティは未だかつてない。

『お友達とパーティなんてわたし何年もやつてない
なんだつたら替わつてもらつてもいい。おれと顔のそつくりな姉
が代理で出席してくれてもいつこうに構わない。しかしそれは不可
能だ。今日のパーティは女性禁止。自分の染色体からYを消せるの
であれば、今日だけは進んでそうしよう。もしくはこれから宇宙人
に誘拐されるとか。マンハッタンにゴジラが出て、パーティどころ
じゃなくなるとか。もちろんどれもあり得ない。おれを乗せたタク
シーは、スマーズにビレッジに到着。こんなときだけ物事はうまく
運ぶのだからシャクに障る。きっと神はおれのことなんかどうでも
いいに違いない。こんなときだけ神の名を思い出す。きっとあっち
も雲の上でシャクに障っているに違いない。』

パーティ会場は小さめのクラブ。照明が落ちたホールは薄暗く、
大型のプロジェクターは真っ白なまま、おれの影だけを写している。
「ディーン、そっちじゃないわよ！」「こっち！」

赤いベルベットのカーテンから顔を出したのはキャロリンだ。手
招きし、おれの腕を掴んで樂屋裏へと引っぱり込む。おれよりも背
が高いのは、履いているハイヒールのせいだけではなく、それはか
つて彼女が“彼”だった時分に、バスケットボールをやっていたこ
とと関係があるんだろう。

「ヒロインが来たわよー！」と、大声を出すキャロリンに、スース
姿の男がスツールから立ち上がる。

「いらっしゃい。逃げずにちゃんと来たつてわけね」腕組みをし、
にんまりと笑みを浮かべるのはローマン・ディスティニー。
「逃げたりなんてするもんか。勝負は勝負だからな。どんなことが
あってもここに来るつもりだつたぞ」

“宇宙人にさらわれますように”と願つていたことを隠し、おれもまた腕組みをする。

「まあ男らしい。でもそれは駄目よ。今夜は“女の子のパーティ”なんだから、おしとやかにね。キャロリン、ディーンの衣装は?」「その衣装ケースに全部入つてるわ」彼女が指した衣装ケースは、フタの部分にガムテープが貼つてあり、そこにマジックで『DEA』と書いてある。こんなにわかりやすくしてあると知つてたら、昨日のうちに忍び込んで盗み出しておいたのに。

ケースを開けるキャロリン、「こんな感じ。ちょっと地味かな?」と、ラメ入りの黒い布を取り出して手渡す。広げて見ると、それはスリットの入つたロングドレスだつた。

「それとこれ。履くときに指をひっかけないように注意して」網のストッキング。おれのサイズがあるとは驚きだ。

「靴のサイズは11でいいのよね?」

ツヤ消しの黒いハイヒール。婦人靴のサイズは10までじやなかつたか?

「これはメイクのあとでね。でもその前にサイズを確認したいから、一度かぶつてもらえるかしら?」

ほぼ黒に近いペーブルのカツラ。きっとライトを当てたら奇麗に見えるんだろう。

「かぶるのか……これを……」

「そんなお葬式みたいな顔しないで」白い歯を見せ、キャロリンは笑つた。「カツラをかぶつたからって死にやしないわ」

そうだろう。少なくとも肉体的にはそうだろう。しかしおれの場合、これによつて何かもつと大事な部分が死んでしまうような気がしてならない。

おれの苦悩を氣にもせず、それをかぶせるキャロリン。

「どうかしら? キツくない?」

「大丈夫」

「オーケイ、じゃこれで決まり! 着替えはあつちのドレッシング

ルームでね」

シャツクと並ぶ高身長が、ふたたび腕をがしつと掴む。案内された先は、つい立てで間仕切りされた簡易ドレッシングルーム。化粧と香水の匂いでいっぱいの空間には、スパンコールや羽根でドレスアップした“女の子”たちがいっぱいだ。中にはまだドレスアップ途中で半裸状態の者もいて、これが“本物の女の子”だつたら目のやり場に困るところだが、その心配には及ばない。この催しは女人禁制。“女の子のパーティ”でも女性はいない。立ち入りを制限されているのは、染色体がXXの“本物の女性”だ。

ストッキングとハイヒールを手に、おれがここで何をやっているのかって？ そもそも発端はビリヤードにある。バーにビリヤードテーブルがあるのはとくに珍しいことじやないし、「せつかくだから何か賭けようか」という話になるのも珍しいことじやない。おれは玉突きの腕にはそこそこ自信がある。勝負の相手は酒に酔つたローマン。彼が賭けたのはプレゼントされてから一度もつけてないという、アイクポッドの腕時計。こつちはすっかりそれを貰う気でいたので「もし負けたらなんでも言つことを聞くよ」とかなんとか言つてゲームをスタートさせた。

おれは誇りを賭け、ローマンは金品を賭けた。神話や伝説などでは誇りを賭けた者が勝つのが相場だが、今回に限りそれはそうはならなかつた。8番のボールをポケットに撞き落とし、微笑む悪魔。こんなに強いと知つていたら勝負など挑まなかつただろうし、もしだとしても何も賭けなかつただろう。

「女装してミスコンに出場すること」

それが悪魔こと、ローマンが出した条件だ。

ゲイによる、ゲイのための、ゲイだけのパーティ。メインのイベントはミスコンテスト。そのタイトルは“ミス・アメリカ”。“ミス・ユニバース”くらいにしておこうといつ謙虚さは、ド派手な衣装に身を包んだ淑女たちに、不必要なものなのだろう。

勝負は勝負。いさきよくドレスを身に着け、“ミス”は鏡の前に

腰を降ろす。

「そんなに硬くならないで」と、キャロリン。「これから奇麗になるんだから、もっと楽しめなくっちゃ」

そう言われても、いちどら網タイツを履いて楽しい気分になれるほど、人間ができるわけではない。せめてボールにマイクしてもらえるんであれば、多少は気も楽なのだが、彼はまだ職場にいる。恋人が心細さでいっぱいになつているときであつても職務を遂行するとは、まさにプロの鏡だ。

おれの不安を読み取つたか、「ポールじゃなくて残念よね」とキャロリン。「でも心配しないで、アタシにまかせて。がつたり美人にしてあげるから……」言いながら、マイクボックスから、ボトルとチューイングを選び出す。これから“がつたり美人”になるであろう、鏡の中の自分と対峙していると、賑やかな笑い声が室内になだれ込んだ。

「あらつ！ 誰かと思つたら『ティーン』じゃない！？」と、ハレン（男）

「うそつ！ あなたも出場するの？！」目を見開く、モナ（男）
「すうじい！ これは見物ね！」最後に叫んだのは、『ティヴィッシュ』（男）
男…「これは言つまでもない」

“あらつ”“うそつ”“すうじい” それらを片つ端から否定したい衝動にかられるが、どれも真実なのでそっぽいかない。三人のレディースはあつという間におれの背後を固め、ドレスと網タイツとハイヒールについて、ひと通りのコメントを述べ、最後に「ヒゲはどうするの？」と、質問した。

「この際だから、剃つてしまいましょ」と、キャロリン。

「バカ、よせ！」

「すぐ生えてくるわよ」

「すぐなもんか！ ちゃんとした形になるまでけつこうな時間がかかるんだぞ！」

「やーね、それぐらいのことで大声出して」

「ヒゲがないと駄目なんて、あんたつたらアラブ人？」

「マツチヨそのものね」

……ボロクソだ。ちょっとヒゲをかばつたからって、こつまで言わねきゃいけないのか。

「このままだと女装が完璧にならないじゃない」

「ヒゲがある女なんていないわよねーえ？」

「剃つたほうが素敵よ」

「そうよ、こんなヒゲ時代遅れよ」

まったく、好き勝手なこと言いやがって……。

「わかったよ！ 剃れ！ 好きにしろー！」

雄々しい決意に“キヤー”と叫び、ぱちぱちと手をたたくレディース。

「そのかわり美人してくれよ。お笑いみたいにしないでくれ

「もちろんよ」

プライドのみならず、ヒゲまで失った。こつなつたら誰より美人になつてやる。全員、蹴散らしてタイトルを獲つてやるぞ！ ドレスのせいいか網タイツのせいいか、おれはいつもよりマツチヨみたいだ。そこから先是生け贅の羊よろしくなすがまま。皮膚呼吸ができるくなるんじやないかと思えるほど、何種類ものクリームと粉を顔中に塗布され、目に突き刺さりそうな角度で筆が走り、まつ毛を挟まれたあげく、その上に二セのまつ毛を乗せられ、どこに脣があるかわかるように枠線を引かれ、その中を塗りつぶされる。最後にカツラをピンで留め、永遠とも思える、忘我の時が過ぎたあたりで「さあ、できた！」と、キヤロリンが叫ぶ。

鏡よ鏡……世界でいちばん奇麗なのはだあれ？

「んまあ！ けつこう見れるじやない！」

「あつたりまえ！ アタシのメイクの腕がいいのよー！」

「クールビューティね」

「こういう女モデルつていない？ いるわよね？」

プロのメイクアップアーティストであるキヤロリン。両肩に手を

置き、鏡越しに ore の顔を覗き込む。

「どう? 「感想は?」

「姉貴そっくり」

「美人なのね」

「ああ、よくオカマに間違えられてる」

まばたきする度にまつ毛の重さを感じる。自分にまつ毛があるなんて、これまで意識したことなかつた。重いのはまつ毛だけじゃない。耳もだ。金ピカの「テカ」いやリング。どうして女性はこんなモノを装着していられるんだろう? パーティが終わる頃には、おれの耳たぶはすっかり伸びきってしまうんじゃないだろうか。

「あら~、いいじゃなく~い!」クリップ付きのボードを小脇にはさんだローマンが姿を現す。

「さすがキャロリン。素晴らしい仕事ぶりだわ」

「うふふ、ありがと。こないだ教えてくれた、ラ・プレリーの化粧下地。あれすっごく使えるわね」

「技術と下地だけじゃない。土台がいいんだ。ハンサムってのは女装してもサマになる。中世ヨーロッパの俳優みたいに」

「ああ、はいはい。わかつてるわよハンサムちゃん。で? 名前はどうする?」

「名前?」

「ステージで呼ぶ名前よ」

「ディーンじや駄目なのか?」

「今日の出演者はみんな女の子の名前なのよ。ディーンなんて女いる? マリリンでもオードリーでも、今日は好きな名前を名乗つていいのよ」

好きな名前と言われても、憧れている女性名なんて ore にはない。

「なんでもいい。オルガとかバーサージャなれば」

「ディーンの女性名はディアナよね?」キャロリンが口火を切ると、エレンは「まんまじや芸がないわよ」と、身を乗り出す。「ね、ジヤクリーンってのは? ちょっと知的な感じで合つてると思わない

？」

「やあよ、ケネディの女房を思い出すじゃない。もつと軽い感じのがいいわよ。ヒッピーの赤ん坊風にレインボーなんてのはどう? またこれだ。こつたんしゃべり始めるとなればなることは必至。妙ちきな名前を付けられる前に（“レインボー”だつて?）自分でとつと決めたほうが賢明だ。

「アイリーンにするよ。この顔見えてる、それしか思い浮かばない「オッケー……アイリーン」ひとつ……」ローマンはボードに名前を書き付けた。

「それと登場の曲だけど」

「まだ何があるのか

「マドンナの曲まだうへ。」

「もうなんでもいい」

「“ライク・ア・ヴァージン”は知ってるわよね? 歌える? 「歌?」

「ただ前に出るだけだと思った?」

「冗談だろ! ? 歌なんかうたえるか! ?

「サポートをつけてあげてもいいわ。デューリッシュで。マドンナとブリトニーみたいに

「あれってキスするのよね! ?

「いや~ん! やるの? ねえ? キスする? 「..

「ディーンとしたらぜつたい盛り上がるわよー」

すでに盛り上がっているところに水を撒くようだが、ステージで

歌なんて絶対に嫌だ（キスはもつと嫌だ! ）

「キスも歌もしたくない……ほんと勘弁してくれよ」

あまりにも哀れっぽい口調だつたせいか、さすがの悪魔も同情したらしい。ステージではロンダート（両手を床につき、倒立回転着地）を披露して、歌はナシで折り合いがついた。ミスコンではあまりお皿にかかる」とのない技だが、世間には男勝りな女もいるはずだ。

「ポールが来たわよ！」

ようやく姿を現したボーアフレンド。おれは声音を変え、出来うる限りの微笑みを浮かべ、振り返る。

「ハイ、ポール。アタシ、どう見えるかしら？」

ポールはコメントを発せず、身体をしの字に曲げて爆笑している。この姿を見れただけでもやつた甲斐があった。彼を笑わせることな、おれの幸福のうちのひとつだ。

「どうだ？ 美人か？！」

「ああ……ほんと……最高だよ」 よりやく息をつき、絶え絶えにしぶやく。

「これからバーにでも出かけて、金持ち男でもひっかけようか」 髪をかきあげ、美人は提案。

「いいアイディア。ぼくは陰で見守つてるよ」

ローマンが両手を叩いて合図をする。「そろそろ始めるわよ！ お客様の入りも上々！」

「はーい！」 答えるガールたちの声。そのトーンは一般的な“ガールズ”より一オクターブ低い。

控え室を出ようとするポール。振り向き、「ひとつ聞いていい？」と、言つ。

「なんだ？」

「下着はどんなのを着けてるの？」

さすが我が恋人。ぜつたに聞かないでほしいと思つていたことをピンポイントで聞いてきた。

窮しているところにローマンの声が飛ぶ。「やー。保護者は出て出で！ ビデオカメラを回すなら、いいシートを確保しなくちゃでしょー！」

「じゃ、あとで。グッドラック！」 化粧を崩さないよう、素早く頬にキスをくれるポール。保護者はカーテンの向こうに消えたが、今のキスでずいぶん気分がよくなつた。

笑顔とキスと魔法の言葉。恋つてヤツは単純なものだ。“おしと

やか～に”との忠告も忘れ、ミス・アメリカ候補は雄々しく叫ぶ。
「ようしー・勝負に出るぞー！」

コンテストの参加者は様々。正統派美女から、お笑い系まで、ありとあらゆる種類の“人間”（他に何て言えばいいんだ？）が、スポットライトを浴びている。なかには頭に金魚鉢を装着した者までいて、ステージはなかなかに盛り上がっている様子だった。

自分は初心者なので、とりあえず参加することに意義がある……と、思つてはいたが、こいつなつてくると、ちょっとは賞を狙いたくもなつてくる。トップとまではいかなくとも、何かしらの栄誉を（これが“栄誉”と言えるかはともかく）。ステージの陰で出番を待ちながら、みづやくポジティブになつてきたあたりで、それは起きた。

前のエントリーが終わり、ようやくおれの番となつたとき、流れ始めたのはベースの音。このイントロ。誰もが知つててるマドンナのヒット曲だ。

「歌わないって言つたじゃないか！」客席に聞こえないよう、キャロリンに小声で怒鳴る。

「アタシに言われても困るわよー」

「曲を止めてくれ」

「今から？ 無理よ！」

女装は初体験。心拍数は急上昇。鼓動はまるでヴァージンのよう。

「ミス・アイリーン！」

司会者に名前を呼ばれた。

「ほら出て！ 早く！」

半場、押し出されるようにして、ステージに飛び出す。

カツラをかぶつたからって死にやしない。ヒゲをなくしてもノーブログフレム。歌をうたつたところで……たいしたこつちやないはず

だ！

腹をくくつてマイクスタンドを掴んだところで、客席から怒鳴る
ような檄が飛んだ。

「アイリーン！」

興奮に立ち上がるひとりの男。照らされたライトでよくは見えないその顔を、目を眇め、おれは凝視する。それが誰だかわかつたときには、時すでに遅し。歌い出しはすっかりハズし、空中宙返りも忘れる瞬間。

おれを『アイリーン』と呼んだ男。それは『アイリーン』という名の妻を持つ男。世界でたったひとりのおれの義兄が、客席からおれを見つめていた。

ショウの後、おれと義兄は会場の隅の一人掛けソファーに座り、久しぶりの対面に乾杯をした。

「まさかあなたがこんな場所に来るなんて」

驚きを込めて言う義弟に、「きみこそ」と、笑う義兄。「“こんな場所”で“こんなこと”を」

メイクを落とし、普通の服に着替えたところで、ドレスとカツラのインパクトは拭えない。これまでどんなにキチンとした身内だったとしても、それは今日までのこと。今夜の出来事により、かつての印象は一気に塗り替えられたに違いない。

コンテストでは優勝は逃したものの、審査委員長のローマンは『ミス・ハプニング』の栄冠をおれに与えてくれた。ステージ上で義兄弟の対面。ドラマチックなそれは演出と見まごうだったと、人々のコメントを聞くだに、意図とはまったく違うところではあるが、観客にウケをとることは出来たようだ。（ちなみに『ミス・アメリカ』は、ホイットニー・ヒューストンそっくりの美女。むろん勝ち目なし）

姉の夫で、甥と姪の父親。大手保険会社の取締役。競走馬の飼育

に関連した牧場のオーナー。短く言えば大金持ち。笑った感じは口バート・レッドフォードに似てなくもない。おれは子供の頃からそう思っていた。それがこの義兄、ノーマン・シェパード。着用しているのはブランド物ではない仕立ての良いスーツ。FBIみたいに地味な色だが、それは彼の白っぽい金髪によく似合っている。

「クリスマスプレゼントをありがとう」数ヶ月遅れで礼を述べるノーマン。軽く前屈みになり、膝の上で両手を組んで、にこっと微笑む。そう、これこれ。“口バート・レッドフォードの笑み”だ。

「ロメオ・Y・ジュリエッタの葉巻ケース。愛用させて貰ってるよ。よく銘柄を覚えていたね」

その口ぶり。最初に会った頃と少しも変わらない。“よく覚えていたね”って、今にも頭を撫でそうだ。

「今きみとこうしていることが信じられない。あのマイティロとトムコリンズに口をつけ、ふつと笑う。

“マイティロ”それはおれが子供の頃、家族の中だけに通用したニックネームだ。アイリーンは大学でノーマンと出会い、若くして結婚をした。おれが初めてノーマンと会ったのは九つの時。彼は“ヒゲのないティーン”を知っている希少な人間だ（でも今日だって“ヒゲのないティーン”だけど）。

「きみがゲイだとは知らなかつた」

その意見はとりあえず否定しないでおこう。マイティロは女裝して“ミス”になつてゐ。ここでゲイじゃないと言つても、おそらく信じてはもらえないだろう。

「あなたこそ」ジンリックキーのライムをマダラードつぶし、ひと呑吸おいておれは切り出す。“姉から聞きました。離婚のことを

「さうか」

「姉とあなたは……うまくいってること思つてました。あなたはいい夫だと」

「いい夫か……」と、トムコリンズで唇を濡らせる。

「彼女はあなたに女がいると思つてました。あなたはいい夫ですよ

「女も男もいない。ただ時折こうこうとひたひたへりでね。
孤独なものさ」

“「こうこうとひたひたへりでね。」？「こうこうとひたひたへりでね。」それって浮氣をしていると捉えていいものなんだうか。

「いい夫……」さつきと同じ単語を口にするノーマン。「結婚後に自分がゲイだと気がつくことが悪だと言われば一言もないよ」ノーマンはテーブルの先を見つめている。それはどこか寂しげな面持ちだ。

“自分がゲイだと気がつくことが悪だと言われば一言もない”それを言えば、おれだって似たようなものじゃないか。宗日替えするこどが悪か？自分の本当の姿に気がつくことが？『もつきみを愛してない、自分は男が好きなんだ』ノーマンはそれで苦しんだのだろうか……？

ジンリックキーは苦い。いつまでもライムをつぶし続けたせいで、カクテルが台無しになつた。薄暗い照明、ゆるいレゲエ。ボブ・マレーは沈黙の助けにはなつてくれない。

「覚えているかな？一緒に野球に行つたことを『重たい雰囲気を吹き飛ばすよ』に、ノーマンは顔を上げた。

「ええ、もちろん」話題が変わつてほつとし、おれは笑顔で応える。「生まれて初めてスタジアムに行つた日のことは忘れっこない」「きみはグローブを持ってきてた。『ファウルボールを取るんだ』」つて

「結局はポップコーン入れになりましたけどね」「ロックフェラーセンターにスケートに行つたこともあつたな」「それとライヴにも。母が『ノーマンとなら行つてもいい』って。ボンジョヴィを観に」

思えば彼にはずいぶん遊んでもらつた。ノーマンは本当に子供好きで、だからこそおれは彼に“いい夫”的印象を抱いていたのだが……。

「好きな子のことを聞かせてくれたね。同級生の女の子だ

記憶はないが、きっとそんな話もしたんだね。おれは男の兄弟がない。野球やハードロック、恋愛の相談……姉とはできることを、ノーマンは共有してくれた。

「きみと今夜、会えたことが嬉しい」

おれの顔をじっと見るノーマン。その瞳はグリーン。懐かしい。おれはすっかりそのことを忘れてしまっていた。

「じつして酒を呑んでは奇妙な感じだ。その昔、ぼくらはストレートだつたというのに。それが今やふたり並んで……」カクテルのグラスを空にして、それをテーブルの向こうに押しやる。それから再度、こちらに向き直り「こんなにすてきになつていいとは」と、おれの顎に指を添える。ヒゲのないそこに触れられるのは何年ぶりのことだらう。それもまた長らく忘れていた感覚のひとつだ。

「マイティ……ディーン」

ふいに彼の顔が近づく。懐かしいコロンの香り。それを感じたのは一瞬のこと。コロンと脣。テーブルから落ちたグラスと周囲から上がった悲鳴。床に尻を打つノーマンと仁王立ちになるおれ。すべては一瞬のことだ、おれが自分の怒鳴り声を聞いたのも、ほぼ同時に起きたことの一部だった。

「あんたは……あんたはおれの義兄だ……アイリーンの夫なんだぞ？」

後になつて思えば馬鹿な台詞だ。『なにするんだー』でも『この野郎！』でもない。それはただの事実であり、相手にダメージを与える種類の言葉ではないというのに。

ノーマンは床にしゃがんだまま、おれを見上げ、静かに言った。「法的にはまだそうだ。だが実際はもつ違つ。わたしはきみの義兄でも、アイリーンの夫でもない」

罵倒とはほど遠い言葉。それもまた単なる事実に過ぎない。

「いつたいどうしたの？」と、誰か（たぶんキャロリンだ）が言ったが、おれはそれに答えなかつた。答えず、ただ店を出た。

やみくもに通りを歩く間、一人の通行人にぶつかつた。そのうち

のひとりは「くそったれ！」と、怒声を発する。そうだ。こういうのが『相手にダメージを与える種類の言葉』だ。ノーマンが言った台詞は、そういう種類のものではない。そうであるはずなのに、おれは一発食らった気持ちになっていた。

また一人、通行人と肩が当たる。なんでこんなにぶつかるかつて、涙で前がよく見えないってことと、おそらく関係があるんだろう。ちきしおう。なんだつてこんなに泣けるんだ。アイリーンのための涙か？ それとも可愛い甥と姪のこと？ キスされそうになつてムカついた？ 少年時代の想い出を汚された？ そんなんじやない。どれもちがう。だつたらなんで……おれは泣いたりなんかしているんだ？

「ディーン！」呼び止められ、おれは足を止める。もともと行くアテもない。呼ばれなきやこのままマンハッタン中を歩いていだらうが……。

息せき切つて、追いついてきたのはポールだ。おれの泣き顔を見て、はつとした表情をしたが、動搖を声に出すことはせず、「いったい彼に何をされたの？」と、優しく腕を撫でてきた。

「大丈夫だ。おれは何もされて……」ここまで言つて、あるひとつのみに思つた。

「ああ、まいったな……“何もされてない”のに、彼を殴つちました。どうじょう。これってあきらかな傷害罪だよな？ おれはどうなる？ S・Tインシュアランスの代表から訴えられたらおれは……」

「ディーン、ちょっと落ち着いて。ね、まずは何も考えなくていいから。さつきからきみ、呼吸がすゞしく浅くなつてるんだ」

「ああ……」

促されるまま、深呼吸をする。息を吐いたり吸つたりしてこらえちこらえ、だんだん気持ちが落ち着いてくるのがわかつた。

「みつともないな、自分のことでもないのこらえちこらえに泣いて、シャツの袖で顔を拭う。

「自分のことじやないから泣けるのセ」

「ああ、そうか。いいこと言つ。そりだよな。

「彼は……ノーマンは……こんなの……アイリーンになんて言つたらいい……」

「なんて言つたらいいって？ きみが網タイツはいて、ドラッグクイーンになつたこと？」

「ポールの「メント」に、おれは思わず笑つてしまつ。

「そりだな、それを知られるのはマズい……」

今はそれを知られるのは困る。今は何も言つ必要はない。彼女がマイアミで元気を取り戻し、新しいボーイフレンドをみつけたころに、おれの女装とセットでこの笑い話をしてやればいい。

「家に帰ろう」おれの手をとるポール。「除毛フォームを使つたこと、ローマンから聞いたよ。早く家に帰つて、きみのつるつるの足にキスしたいな」

「つるつるのアゴにもな」

「そりだか。それは今のうちだよね？」

「ああ、明日からまた伸ばす。女らしきのは今夜までだ

「ミス」とベッドインするのは初めてだな」

「おれは“ミス”になるのは初めて」

どちらともなく、くすくす笑いが沸き上がる。おれたちの間にいつも発生する化学反応だ。

「ミスがどんな下着をつけてるか知りたいか？」

「うーん、実はあまり知りたくないね。脱いだ後のほうが興味あるかな。それより歌は？ ほんとにマドンナの曲を歌うつもりだった？」

？」

「まあ、あの場はでな。仕方ないだろ」

「下着より歌がいいな。歌詞は頭に入つてる？」

「いいや」

ベッドで歌わされることを危惧してシラを切つたが、実のところマドンナのCDはばっかり所有している。“ライク・ア・ヴァージ

ン”は田を閉じてたつて歌える曲だ。

口は「こそしないか」今の気持ちはその歌詞は同じ
ルーだつたけど（I was sad and blue）でもあ
なたは感じさせてくれた（But you made me fe
el）新しい輝きを感じさせてくれたのよ……（Ya you m
ade me feel shiny and new）』

“ミス”になつて初めて、マドンナの心理と同じところに行き着
いた。それはカツラやドレスの効果じゃない。優しい恋人が、おれ
にラブソングの意味を自然と理解させてくれた。

おれたちは歩いて帰路につく。揃つて一定のビートを刻んで歩く。それはまぎれもない恋人のリズム。好きな子と初めて手をつないだ日のことは覚えていないが、どんなだつたか想像はつく。それは今までにいい気分。恋をするのは初めてじゃない。それでも心拍数は急上昇。鼓動はまるでヴァージンのよ……。

今夜、理解したのはマドンナの曲。笑顔とキスと魔法の言葉。他に必要なものは何もない。

A 10x10 grid of points. The symbols at the intersections are as follows:

- (1,1): *
- (1,2): o
- (1,3): .
- (1,4): .
- (1,5): .
- (1,6): .
- (1,7): .
- (1,8): .
- (1,9): .
- (1,10): .
- (2,1): .
- (2,2): .
- (2,3): .
- (2,4): .
- (2,5): .
- (2,6): .
- (2,7): .
- (2,8): .
- (2,9): .
- (2,10): .
- (3,1): .
- (3,2): .
- (3,3): .
- (3,4): .
- (3,5): .
- (3,6): .
- (3,7): .
- (3,8): .
- (3,9): .
- (3,10): .
- (4,1): *
- (4,2): .
- (4,3): .
- (4,4): .
- (4,5): .
- (4,6): .
- (4,7): .
- (4,8): .
- (4,9): .
- (4,10): .
- (5,1): .
- (5,2): .
- (5,3): .
- (5,4): .
- (5,5): .
- (5,6): .
- (5,7): .
- (5,8): .
- (5,9): .
- (5,10): .
- (6,1): .
- (6,2): .
- (6,3): .
- (6,4): .
- (6,5): .
- (6,6): .
- (6,7): .
- (6,8): .
- (6,9): .
- (6,10): .
- (7,1): .
- (7,2): .
- (7,3): .
- (7,4): .
- (7,5): .
- (7,6): .
- (7,7): .
- (7,8): .
- (7,9): .
- (7,10): .
- (8,1): .
- (8,2): .
- (8,3): .
- (8,4): .
- (8,5): .
- (8,6): .
- (8,7): .
- (8,8): .
- (8,9): .
- (8,10): .
- (9,1): .
- (9,2): .
- (9,3): .
- (9,4): .
- (9,5): .
- (9,6): .
- (9,7): .
- (9,8): .
- (9,9): .
- (9,10): .
- (10,1): .
- (10,2): .
- (10,3): .
- (10,4): .
- (10,5): .
- (10,6): .
- (10,7): .
- (10,8): .
- (10,9): .
- (10,10): .

荒野を通り抜けて、そのままでせりあがた。ナツサヘザリイへ辿り着いたんだ。

(I made it through the wilderness somehow. I made it through somehow.)

(Didn't know how
I found you)
lost
I
was
Un

きみは最高。きみはおれのもの。おれのこと強くし、勇敢にも

してくれる。

(You're so fine And you're mine
e Make me strong you make me b
old)

まるで初めてのときのようだ。初めて触れた時のような感じがする。

(Like a virgin Touched for the
very first time)

きみのハートが鼓動する。その次はおれの番。

(Like a virgin With your heart
beat Next to mine)

ああベイビー、おれの鼓動が聞こえる？ それってまるでヴァーディンみたいなんだ……。

(Ooh baby Can't you hear my heart
beat For the very first time.
- - - Like A Virgin / Madonna

End.

(後書き)

最後までお読み頂きありがとうございました。

もしよろしければ、ご感想など頂けると幸いです。

本作品は「H.ピノード6：ママがやつてきた！」(<http://nocode-syosetu.com/n5856c/>)に続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4881c/>

ニューヨーク・ラブストーリー / エピソード5：姉と弟 (Like A Virgin)

2011年8月15日03時25分発行